

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK300701
種別	論文A
タイトル	連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照 —コレスポネンス分析による成立要因の検討—
Title	A Contrastive Study of Japanese and Chinese in Transitive Sentences with Inanimate Subjects by Using Theory of Collocation: An Investigation of Factors by Using Correspondence Analysis
著者	麻 子軒
Author	MA Tzu-Hsuan
掲載号	30巻7号
発行日	2016年12月20日
開始ページ	395
終了ページ	416
著作権者	計量国語学会

論文 A

連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照

—コレスポンデンス分析による成立要因の検討—

麻 子軒 (大阪大学大学院生)

要旨

本稿の目的は、日中両言語における（「鍵がドアを開けた／鑰匙打開了門」のような）無生物主語他動詞文を、連語論的アプローチという方法論を用いて比較し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることである。日中の大規模コーパスを利用した調査とコレスポンデンス分析による検討の結果、対格名詞を物に限定した「物に対する働きかけ」の場合、両言語の無生物主語他動詞文の成立においては、動詞の「再帰性」と「受影性」とが共通の要因として働いていること、また、各タイプの名詞と結びつきやすい動詞の種類は、その名詞の性質と深く関わっていることが分かった。例えば「風」のような「自然自律」タイプの名詞は、「受影性」の高いものから低いものまで幅広い動詞と結びついて連語を作っているが、「樹木」のような「植物自律」タイプの名詞は、もともと外部に働きかける力が弱いので、「樹木が実を結ぶ」のような「再帰性」の強い生産動詞による結びつきに集中している。また、日本語では「自然自律」などのタイプの名詞が「風が音を立てる」のような生産動詞による結びつきを数多く作るが、中国語では同じタイプの名詞にこのような結びつきがあまり観察されなかったことが両言語の最大の相違点である。

キーワード：無生物主語他動詞文、連語論的アプローチ、コレスポンデンス分析、BCCWJ, SINICA, 再帰性, 受影性, 他律性, 日中対照

1. はじめに

本稿の目的は、日本語と中国語における無生物主語他動詞文を比較し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることである。無生物主語他動詞文とは、以下の (1) ～ (6) に挙げたような、無生物名詞が主語となる他動詞文のことである。

- (1) 砂塵が空を覆った。（中津文彦『埒保己一推理帖』）
- (2) 沙塵覆蓋了天空。（筆者訳）
- (3) ？ 鍵がドアを開けた。（熊 2009 : 162）
- (4) 鑰匙打開了門。（筆者訳）
- (5) 風が音を立てた。（山崎玲子『もうひとつのピアノ』）
- (6) ？ 風發出了聲音。（筆者訳）

同じ無生物主語他動詞文であっても、(1) (2) のように日本語と中国語が両方成立す

るパターンと、(3) (4)・(5) (6) のように一方のみが成立するパターンがある。このように、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の成立メカニズムは、それぞれ異なるように考えられる。

この問題についてはこれまで、名詞（主語と目的語）に注目するアプローチと動詞（述語）に注目するアプローチが採られてきた。その結果、名詞と動詞はどちらも無生物主語他動詞文の成立要因として働いていることが明らかになった。しかし、名詞と動詞の両方を同じ枠組みのなかで扱い、この問題にアプローチした研究は未だに見当たらない。本稿は、名詞と動詞を同時に扱う連語論的アプローチを採用し、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の分類を試みる。さらに、その量的分布をもとに、コレスポンデンス分析という統計手法を用いて、両言語の無生物主語他動詞文の異同を明らかにする。

2. 先行研究

無生物主語他動詞文に対するはじめての系統的な考察は、角田（1991）と熊（2009）であった。角田（1991）は、Silverstein（1976）が提案した「名詞句階層」を用いて、無生物主語他動詞文を説明した。名詞句階層とは、名詞を「活動性」の度合いによって分類する概念である。Silverstein によると、名詞は「人称代名詞」「親族名詞」「固有名詞」「人間名詞」「動物名詞」「自然名詞」「地名名詞」という順に活動性が低くなり、かつ、目的語となる名詞と比べて相対的に活動性が高い名詞が、その該当文の主語にもなりやすい。角田（1991）はこれをもとに、無生物名詞が主語であっても、目的語となる名詞に対して名詞句階層が上位にあれば文が成り立つとした。ところが、日本語の無生物主語他動詞文には、(7) のように名詞句階層に違反しているにもかかわらず成立するものと、(8) のように名詞句階層に違反していないにもかかわらず違和感を覚えるものがある。

(7) 絶望が俊也を襲った。（二条睦『監獄女医』）

(8) ? 台風が窓ガラスを割った。（熊 2009 : 94）

(7) における無生物主語「絶望」は階層上、目的語「俊也」より低い位置を占めているため、名詞句階層理論に違反することになるはずだが、文としては成立する。一方、(8) において「台風」は階層上、目的語「窓ガラス」より高い位置にあるため、名詞句階層のルールを守っているにもかかわらず、不自然さが感じられる。このように、(7) (8) はどちらも名詞句階層では説明できない用例であり、名詞句階層説の限界を示している。

これに対し、熊（2009）は「他動性」という異なる観点を取り入れてこの問題を説明しようとする。熊は、まず無生物主語他動詞文を「所属関係の文」と「非所属関係の文」とに分け、さらに「非所属関係の文」を「能動的な文」と「受動的な文」とに分ける。「所属関係の文」とは、(9) のように、主語と目的語が同一の実体である文、つまり再帰的な構文のことを指している。この構文では、「建物」と「姿」は同じものを違う視点で捉えたものとして解釈することができる。

(9) 懐かしい建物が姿を消した。（熊 2009 : 113）

一方、「非所属関係の文」とは、文字通り「所属関係の文」ではない構文を指しているが、その下位分類である「能動的な文」と「受動的な文」は、それぞれ以下の (10) (11) のようなものである。

(10) 強烈な陽がしだれ桜を照らしている。(熊 2009 : 140)

(11) しだれ桜が強烈な陽を受けている。(熊 2009 : 140)

(10) では、主語「陽」が目的語「しだれ桜」に対し、光を当てるという働きかけをするが、(11) では、主語が目的語に働きかけるのではなく、逆に目的語「陽」が主語「しだれ桜」に働きかけている。熊 (2009) では、(10) のような構文を「能動的な文」、(11) のように述語が語彙的な受身動詞の構文を「受動的な文」と称した。

熊は以上の 3 種類の構文に対して、「受動的な文」と「所属関係の文」は見かけ上他動詞文の形を取っているだけで、実際には述語の他動性が低いため、活動性をそれほど強くもたない無生物名詞でも主語に立つことができ、無生物主語他動詞文として成立しやすいと主張した。ところが、述語の他動性が高い「能動的な文」に関して、なぜそれが無生物主語他動詞文として成立するのかについては説明できず、結局「能動的な文」を有對他動詞であるかどうかによっていくつかのグループに分類するだけに留まり、他動性をもっても無生物主語他動詞文の成立に対して一貫性のある説明を与えることができなかった。

以上概観したように、角田と熊は「名詞句階層」と「他動性」という説明原理を提出した点において、無生物主語他動詞文の研究に大きな貢献をなしたが、文の一部である名詞か動詞かの一方しか見ないところに問題があるものと思われる。無生物主語他動詞文の成立は単に名詞か動詞か一方だけの問題ではなく、両者が互いに影響し合うものだと考えられる。本稿では、名詞と動詞を同時に扱う連語論的アプローチを採ることによって、日中両言語の無生物主語他動詞文の成立要因とその異同を明らかにしたい¹。連語論的アプローチには、日本語と中国語との 2 つの言語を連語論という同じ枠組みのなかで論ずることができ、対照研究が可能になるという利点もある。

3. 用語の規定

本節では、本稿のなかでも特に重要ないくつかの用語を詳しく規定する。以下、「無生物」「主語」「他動詞」の 3 語について述べる。

まず、「無生物²」とは人または動物でないものを指し示すもので、「有生物」の反対の概念である。『分類語彙表』(国立国語研究所 2004) の中項目で言うならば、「抽象的關係」「人間活動—精神及び行為」「生産物及び用具」「自然物及び自然現象」に属するものが「無生物」に当たる³。中国語では『分類語彙表』のようなシソーラスはないが、日中

¹ 熊 (2014) でも述べられているように、無生物主語他動詞文は単文レベルによるものだけでなく、文章レベルによる要因も存在するが、本稿ではまず単文レベルに焦点を当てたいため、文章レベルの要因に関しては今後の課題にする。

² 「無生物」ではなく「非情物」という用語を用いるべきだと主張した研究もある (かねこ 1990) が、本稿では熊 (2009) に従い、日中を比較する際により一般性が高い「無生物」を用いる。

³ ただし、「自然物及び自然現象」の下位分類にある「生物」「動物」は「有生物」に属する。

両言語に限れば意味の分類項目と判断基準が大きく変わることはないと思われるため、中国語の「無生物」に対する定義も日本語と同じ基準で規定を行う。ちなみに、上記の定義では、植物も「無生物」として認めることになる。

次に、日本語の「主語」に関しては、類似した用語に「主格」が挙げられるが、角田 (1991) によると、「主語」は名詞などが文中でどのような役目をするかを表わす文法機能レベルのもの、「主格」は名詞などに現れるまたは付けられる形を表わす格レベルのものであり、両者はそれぞれ違うレベルのものに属する。これまでの研究において、無生物主語他動詞文の構成要素は「主語」「目的語」などの用語で記述されてきたが、後述するように、連語論的アプローチは「主語」や「目的語」のような文法機能レベルのものを論ずる理論ではないため、本稿では「主格名詞」「対格名詞」といった格レベルの用語を用いる。厳密には「主語」と「主格名詞」が指すものが同一でない場合もあるが、本稿で対象にする他動詞文の用例は、「XがYヲZ」のように、「主語」が「主格」で示されたものに限定するため、「主語」と「主格名詞」は実質上同じものを指し示すことになり、記述に矛盾は生じないと思われる。一方、中国語の場合も基本的には日本語と同じで、「主語」となるものは「主格名詞」と記述する。

最後に、本稿において、日本語の「他動詞」に対する規定は、奥津 (1967) に従い、原則として「ヲ格」をとる動詞とする。「走る」「通る」のような移動動詞や、「出る」「離れる」のような離脱動詞がとる「ヲ格」は「目的格」ではないため、これらは他動詞ではなく自動詞として認める。一方、中国語の「他動詞」の定義に関しては、趙 (1979) に従い、原則として目的語をとる動詞とするが、「来」「去」のように、目的語をとるにもかかわらず「存在」「出現」「消失」の意味合いをもつものは自動詞と認める。

4. 調査対象と調査資料

本稿の調査対象となる無生物主語他動詞文とは、以下のようなものである。日本語の場合は、「砂塵が空を覆う」のような「(ガ格の) 主格名詞 + (ヲ格の) 対格名詞 + 他動詞」という文構造を指す。ただ、「重い病気が彼女を襲う」「奇跡が彼を信じさせる」など、名詞に連体修飾成分が付く場合や、動詞にヴォイス成分が含まれたものは他動性に影響が出るため除く。また、「自転車か鈴を鳴らして行く」のように、他動詞文が連用節に当たるものも調査対象から外す(連体節中の他動詞文は対象に含める)。中国語の場合は、「枝葉(和訳: 枝葉が) + 遮住(和訳: 遮る) + 陽光(和訳: 日差しを)」のような「主格名詞 + 他動詞 + 対格名詞」という文構造を調査対象にする。日本語の用例と条件を合わせるために、名詞に連体修飾成分が付くものや、動詞にヴォイス成分があるものもすべて除く。また、後述するように、今回の調査では対格名詞が「物」である「物に対する働きかけ」の用例に焦点を絞るため、「共産党が勢力を拡大する」のような用例は今回の集計には入っていない。ここでいう「物」とは、他動詞で示される具体的な動作が物理的な働きかけを与えることができる具体的な名詞を指す。

調査資料については、日本語・中国語ともそれぞれの大規模コーパスを用いて例文を抽出する。日本語のコーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下 BCCWJ)」を利用する。BCCWJ は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスであり、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律など

のジャンルから抽出された 1 億 430 万語を収めている。収録対象の刊行年代は 1976-2005 年である。本稿では、検索するサブコーパスを BCCWJ のメインとなる「出版・書籍」「図書館・書籍」に限定する。中国語のコーパスは、台湾の中央研究院が構築した「現代漢語平衡語料庫（以下 SINICA）」を調査資料とする。SINICA は、BCCWJ と同じく、言葉の使用実態を反映させるために作られた均衡コーパスで、520 万詞（中国語の単語に相当する）を収録しており、その内容は 1981-2007 年の文章である。サブコーパスは新聞、雑誌全般、書籍全般などがあるが、本稿では BCCWJ で対象にした「出版・書籍」「図書館・書籍」ともっとも近い性質をもつ「図書類」に絞る。BCCWJ と SINICA を選定した理由は以下の 3 点である。1 点目は、収録する資料の刊行年代が近いこと、共時的な対照研究に適している。2 点目は、どちらのコーパスも形態素解析が施されているため、検索の精度が上がる。3 点目は、作者や出版年月などのタグが付いているため、後処理にも利用しやすい。用例の抽出にあたっては、BCCWJ も SINICA も自作の Perl プログラムで行った。

5. 理論の枠組み

5.1 連語論的アプローチ

言語学研究会（1983）によれば、「連語」とは「従属的な結びつきに基づく、2 つあるいは 3 つの単語の組み合わせ」のことである。本稿では、無生物主語他動詞文も特定の名詞と動詞との結びつきによって分類できると想定し、「主格名詞⁴」「対格名詞⁵」「動詞」の 3 つの単語の組み合わせの関係を考える。

ただ、言語学研究会は従属的な結びつきのみを連語と認め、主格名詞による結びつきは陳述的な結びつきとし、連語論の対象として認めていない。これに対し、鈴木（1983）、仁田（1985）、宮島（2005）は、主格名詞による結びつきは主語と述語という機能的な関係だけでなく、名付け的なレベルでの関係をも担っているため、連語として扱うべき側面もあると述べている。また、この立場を受け継いだ連語論の研究に森山（1988）がある。本稿での連語論は、主格名詞による結びつきも連語として認めた後者の立場に従う。ただし、動詞に対する分類は、言語学研究会の枠組を一部参考にした。

5.2 連語論の適用範囲

連語論では、(12) (13) のような「比喩的な表現」と、(14) (15) のような「慣用的な言い回し」は研究対象として認めないため、本稿でもこのような用例を除外する⁶。

(12) 立って、それを見上げていた。視線が、針を追いかける。秒針が時を刻んでいる。—いったいどこなんだ、ここは？（北野勇作『昔、火星のあった場所』）

(13) 八十五年 9 月に番組が幕を引くまで主力ディレクターとして活躍し、八十二年

⁴ 言語学研究会の用語で言うならば、ここではもともと「ガ格名詞」と称すべきだが、本稿では中国語も一緒に扱うため、便宜上「主格名詞」という呼び方に統一した。

⁵ 注 4 と同様で、もともと「ヲ格名詞」と称すべきだが、本稿では「対格名詞」に統一した。

⁶ データの抽出に当たって、「比喩的な表現」と「慣用的な言い回し」の判断は、筆者を含めた 2 名の作業者が判断した。

- 以降はプロデューサーも兼務した。（山田満郎『8 時だヨ！全員集合の作り方』）
- (14) 馬術は選手の寿命が長く、経験がものをいいます。アトランタでは五十歳代の男性が優勝しました。（吉永小百合『吉永小百合街ものがたり』）
- (15) 逆にまた反抗心が頭をもたげ、よくいわれる小津の反骨精神を助長することになったかもしれない。（中村博男『若き日の小津安二郎』）

これらは、単語と単語の結びつきが自由でなく、非恣意的な面が強く、またその言語の文化による影響も大きい。例えば、(12) (13) では、「時を刻む」と「幕を引く」という具体的な動作を描写するより、その動作をすることによって連想された比喩的な意味を表現しているといったほうが適切である。(14) (15) でも、「ものをいう」と「頭をもたげる」はすでにその動作をするのではなく、慣用的にほかの意味に変化している。

以上の理由から、本稿は「比喩的な表現」と「慣用的な言い回し」を別扱いし、まずは組み合わせが自由な結びつきから出発して、無生物主語他動詞文の成立要因を明らかにすることを試みる。言語学研究会によれば、対格名詞と他動詞との自由な組み合わせには、「対象への働きかけ」「所有の結びつき」「心理的なかわり」の 3 類があるが、本稿では、もっとも基本となる「対象への働きかけ」から考察を始める。また、「対象への働きかけ」はさらに対格名詞によって「物に対する働きかけ」「人に対する働きかけ」「事に対する働きかけ」に分けられるが、後述するように、本稿ではまず「物に対する働きかけ」に焦点を当てたい。以下では、本稿で扱う「主格名詞」「対格名詞」「動詞」のタイプについて説明する。

5.3 主格名詞のタイプ

本稿では主格名詞を、その他動詞文が描く事柄の成立要因に基づいて、まず「自律」と「他律」の 2 種類に分ける。自律とは、他力を借りず、主格名詞自身の力によってその他動詞文の事柄が成り立つ場合を指す。それはさらに、主格名詞の本来の性質によって、「自然自律」「物質自律」「機械自律」「身体自律」「植物自律」の 5 類に下位区分される。それぞれの定義と例文を下に示す。

- 自然自律： 雨，風，雷，太陽のような，自然の力によるもの
例 文： 雨が顔を打つ（松岡弘一『利己的殺人』）
- 物質自律： 洗剤（腐食性），汗（液体）のような，物質の内在的性質によるもの
例 文： 汗がシャツを濡らす（立原とうや『掟』）
- 機械自律： 発電機，冷房機のような，動力源をもつ機械自身の力によるもの
例 文： 発電機がうなりをあげる（古澤亜童『中国花みるみる』）
- 身体自律： 心臓，肺のような，自律的に動く身体部位の力によるもの
例 文： 心臓が血液を送り出す（折原一『灰色の仮面』）
- 植物自律： 稲，草，種，果樹のような，植物自らの力によるもの
例 文： 果樹が実を結ぶ（矢口卓『ジャータカとブッダのお話』）

一方，他律とは，主格名詞自身ではなく，人間の影響によって他動詞文の事柄が成立す

る場合を指す。例えば、「メスが皮膚を裂く」という事柄が成立するのは、主格名詞の「メス」自身の力によるのではなく、その背後にいる人間の力（影響）によるものだと考えられる。本稿ではこれを他律と定義し、以下の3類に下位区分する。

- 身体他律： 指、舌、拳のような、人間が自分の意志で動かせる体の一部
例 文： ひとさし指がくちびるをなぞる（杉村暎子『パストラル』）
- 機械他律： 自動車のような、人間が操縦する電気や燃料などの動力源をもつ機械
例 文： 車が人をはねる（森詠『戦場特派員』）
- 道具他律： メス、斧、筆のような、人間が事を行うのに用いる一般の道具類
例 文： メスが皮膚を裂く（沼正三『家畜人ヤプー』）

名詞の本来の性質と自律・他律との関係を見ると、以下のようなことが分かる。「自然」と「植物」は、現実的に人間の力によって動く可能性が低いいため、今回収集した用例では自律のみが存在する。「機械」と「身体」は、人間によるものもあれば、自らの力によるものもあるため、自律と他律とが両方存在する。「道具」は、理論上人間の力がないと動かないため、原則的に他律しか存在しない。そして、「物質」は、その名詞を構成する物質自体の物理的な性質によるものであるため、自律のみが存在する。

ここで注意すべきは、1つの単語が複数の側面をもつことがあるため、同じ単語でも意味的に2つの分類に跨る可能性があるということである。本稿の立場では、そのような複数の側面をもつ単語に対して、現実的にどの側面が働いて連語を作るのか、という点に注目して分類を行う。例えば、「雨が窓を叩く」の場合、「雨」は「自然自律」として分類されるが、「雨がシャツを濡らす」の場合は「物質自律」として捉えられる。したがって、分類の際に、主格名詞だけを見るのではなく、常に動詞も合わせてみないと、主格名詞のタイプを判断することができない。実際、言語学研究会の連語論でも、同じ名詞が作る連語でも結びつく動詞によって異なる分類になる場合がある。例えば、「電車で読む」のデ格名詞「電車」は「空間」を表わすが、「電車で行く」になると「対象」、さらに「電車で遅れる」になると「原因」を表わす、というようなものである。

5.4 対格名詞のタイプ

本稿では、言語学研究会の枠組みに従って、対格名詞を「物」「人」「事」の3類に分ける。例を挙げると、「物」は「鍵がドアを開ける」の「ドア」，「人」は「絶望が俊也を苦しめる」の「俊也」，「事」は「共産党が勢力を拡大する」の「勢力」である。ただ、前節に述べたように、無生物主語他動詞文の構成要素には、「主格名詞」「対格名詞」「動詞」の3つがあるが、同時に3つの変数を扱うのは技術的にも記述的にも困難である。そのため、本稿ではまず変数の1つである対格名詞を「物」に限定し、この条件の下で、主格名詞と動詞との2つの変数の関係を観察する。対格名詞が「人」「事」である無生物主語他動詞文は、今回の考察対象から外し、今後の課題とする。なお、ここでいう「物」は、言語学研究会（1983）の定義によると、他動詞で示される具体的な動作が物理的な働きかけを与えることのできる具体的なものを指すことになるため、「洪水が人々を押し流す」の「人々」も「物」と見なして扱うことになる。

5.5 動詞のタイプ

対格名詞を「物」に限定するため、それに伴う動詞もすべて具体的な動作を表わす動詞である。分類項目に関して、言語学研究会の枠組みを参考にし、「変化」「移動」「接触」「生産」の4項目に分ける。以下にその定義と例文を挙げる。

- 変化： 対象物のあり方または状態に変化を起こす動詞
例文： メスが皮膚を裂く（沼正三『家畜人ヤプー』）
- 移動： 対象物の物理的位置を変化させる動詞
例文： 西風が砂を巻き上げる（星野力『甦るチューリング』）
- 接触： 対象物には状態変化も移動も起こさずに、単に接触到留まる動詞
例文： 雨が顔を打つ（松岡弘一『利己的殺人』）
- 生産： 何らかの物が生産される意味合いをもつ動詞
例文： 果樹が実を結ぶ（矢口卓『ジャータカとブッダのお話』）

6. 調査結果

前節の分類基準に基づき、得られた用例を集計すると【表 1】のような結果となる。今回の調査で得た用例の数は、日本語が 262 例、中国語が 228 例となっている⁷。全体の分布を概観すると、主格名詞の分類において、日本語では「自然自律」、中国語では「自然自律」「身体他律」の用例が多くを占めていることが分かった。また、動詞の分類においては、日本語では「変化」「接触」「生産」がそれぞれ「移動」の2倍近く多いのに対し、中国語では「接触」がほかの3種類の動詞より圧倒的に多いという違いが観察された。

表 1：無生物主語他動詞文の用例数
(各行左のマスが日本語、右のマスが中国語)

主格名詞 \ 動詞	変化		移動		接触		生産		合計	
自然自律	20	14	17	13	40	44	17	0	94	71
物質自律	24	3	8	0	1	2	4	0	37	5
機械自律	1	0	2	2	4	6	15	3	22	11
身体自律	0	1	6	0	2	3	3	9	11	13
植物自律	0	0	0	0	0	1	8	8	8	9
身体他律	3	5	0	8	18	62	0	2	21	77
機械他律	10	9	2	7	17	10	14	0	43	26
道具他律	17	4	1	2	6	10	2	0	26	16
合計	75	36	36	32	88	138	63	22	262	228

⁷ 「井戸が道を遮る」や「日本が空襲を受ける」のような、他動性が低い構文は熊（2009）で説明がなされた上、本稿で扱った「物に対する働きかけ」とは少しレベルの違うものであるため、今回の集計には入れていない。

しかし、【表 1】のクロス集計表だけでは「主格名詞」と「動詞」との結合傾向が観察しにくいので、本稿ではコレスポネン分析⁸という統計手法を導入し、全体の結合傾向を調べる。コレスポネン分析は、多変量解析の一種で、フランスの Benzecri によって 1960 年代に提唱された質的データの解析方法である。その主な目的は、分析対象となる複数の変数をもつ情報をできるだけ少ない次元に要約し、それらを 2 次元の散布図に表して、その座標の相対的な位置を手掛かりに変数の特徴を明らかにすることである。本稿でコレスポネン分析を行うために使用した統計ソフトウェアは R⁹である。【表 1】のデータを R の `corresp` 関数で解析した結果が【図 1】（日本語）と【図 2】（中国語）の散布図である。ちなみに、【表 1】のデータの場合は、理論的に 3 つの次元の解を得ることができる（解の次元数は、行数と列数の小さいほうから 1 を引いた数になる。ここでは主格名詞が 8 タイプで、動詞が 4 タイプであるため、得られる次元数は 3 になる）が、第 2 次元までの累積寄与率が日本語と中国語でそれぞれ 82.06%と 96.94%に達しているため、第 2 次元まで見ればおおよそその傾向が分かると判断し、第 3 次元は検討しないことにした。

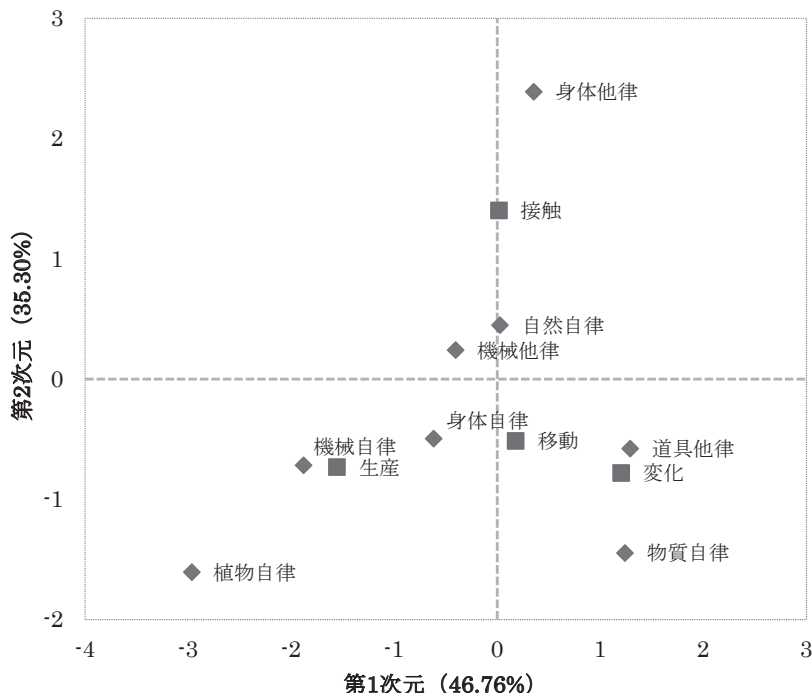


図 1：日本語の散布図（第 1 次元と第 2 次元）

⁸ コレスポネン分析を用いたほかの言語分析の論文として、宮田（2006）、丸山（2015）などが挙げられるが、解釈の方法などはそちらも参照されたい。

⁹ インターネットで公開されたフリー統計解析ソフトウェアである。（<http://cran.r-project.org/>）

コレスポンデンス分析は、主成分分析などとは異なり、パターン分類が主な目的であるため、軸（次元）の解釈が難しい場合がある。しかし、今回のデータで得た散布図ではある程度の傾向が観察できたため、以下、軸（次元）の解釈を試みる。まず、動詞のタイプ（第1アイテム）の「変化」「移動」「接触」「生産」に注目したい。日本語の散布図において、横軸（以下第1次元）では「接触」「移動」「変化」はいずれも座標上の右側、正の方向に位置するのに対し、「生産」のみが左側の負の方向に位置する。上述したように、コレスポンデンス分析では、複数の変数を2つの次元で構成された散布図にプロットすることができ、さらにプロットされた各変数間の位置関係を手がかりに、複数の変数の情報を要約することができる¹⁰。ここでは、具体的に言えば、「生産」は何らかの性質がマイナスであり、その同じ何らかの性質が「接触」「移動」「変化」においてはプラスである、ということを物語っている。「生産」は「再帰性」の側面が強いという点においてほかの3つのタイプの動詞と区別されるため、ここでは第1次元を「再帰性¹¹」と解釈する。高橋（1975）では、あるものとその生産物との関係は一種の所属関係を成しており、自分の所属物に働きかける構文は一種の再帰構文であるとされている。したがって、本稿で扱った、生産物を表わす対格名詞と生産動詞による結びつきも、この定義に従えば広義の再帰的表現と見なすことができる。

実際に用例を見ながら、この軸の解釈の正当性を検討してみよう。第1次元のもっとも左端にある「植物自律」の用例を見ると、8例がすべて（16）のように、生産動詞による結びつきであることが観察された。この用例では、対格名詞「穂」が主格名詞「稲」の生産物となっている。すなわち両者が一種の所属関係を成しており、高橋（1975）のいう再帰構文に相当する。

- （16）ここ数年、稲が穂を出す時期がずれる。七月の中・下旬にきまったように低温の日や異常高温の日が続くからである。（佐藤藤三郎『村に、居る。』）

また、同じく第1次元の左側にある「機械自律」は、22例のうち15例、約7割が（17）のように、生産動詞によって作られた「再帰性」をもつ結びつきである。残りの7例のなかには、（18）のような移動動詞による結びつきが1例あるが、対格名詞「水」が主格名詞「噴水」の一部であることから見て、こちらも再帰構文と考えて良いだろう。

- （17）青いビロードのカーテンが下がっている。シャンデリアが微光を放ち、制服を着込んだ案内係がプログラムや菓子を売りにくる。（森田裕子『サーカス』）

- （18）広場の中央には円形の池があり、噴水が水を噴き上げている。池の横を通りかかったミネルバは、そっと池の水に右手を入れてみた。（舞阪洸『陽炎のエラン』）

¹⁰ ただし、注意が必要なのは、散布図にプロットされた変数間の距離はあくまでも相対的な関係であり、絶対的なボリュームを表わすわけではない。そのため、散布図と原始データの実数を合わせて見ないと、正確に解釈できない可能性がある。

¹¹ 断っておきたいのは、これは散布図を観察して得られた相対的な関係で、本稿では「再帰性」を生産動詞に限定しているわけではない。

これらに対し、軸の右側に行くほど、このような「再帰性」をもつ結びつきの割合は低くなり、中央付近にある「身体自律」「機械他律」「自然自律」では、再帰構文の割合が2割から3割程度に、そして、もっとも右側に位置する「道具他律」「物質自律」では、再帰構文の割合がそれぞれ7.69%と10.81%とさらに低くなっている。以上のように、第1次元は「再帰性」の程度を表し、「再帰性」が強いものほど軸の左側に並んでいることが、再帰構文の割合を観察することで確認できた。

続いて、縦軸（以下第2次元）では、「生産」「移動」「変化」が座標の下側、負の方向にあるのに対し、「接触」のみが上側の正の方向に位置する。同じ要領で解釈すると、これは、「生産」「移動」「変化」は何らかの性質がマイナスで、同じその何らかの性質が「接触」においてはプラスであることを意味することになる。「生産」「移動」「変化」はいずれも対象に何らかの変化（「移動」は物理的な位置が変わることによって、変化の一種と見なすことができる）を及ぼすが、「接触」は単に対象に触れるだけで、何の変化も及ぼさない。つまり、目的語に対する「受影性」の度合いが異なるわけである。この違いにより、第2次元を「受影性」と解釈する。「受影性」の定義は、Hopper & Thompson (1980) に従い、ある対象が働きかけられ、それによって影響を受ける度合いを指す。散布図の位置関係でも、上から下に「接触」「移動」「変化」と並び、「受影性」が低いものから高いものへという順番になっている。この順番自体も、「受影性」という解釈の裏付けになっている。続いて、用例を見ながらこの軸の解釈の正当性を検討してみる。

まず、もっとも下にプロットされている「植物自律」と「物質自律」の用例を観察すると、ほとんどが「受影性」の強い用例であることが分かった。前者はすべて(19)のように生産動詞による結びつきであり、後者は(20) (21) (22)のように、変化動詞、生産動詞、移動動詞による結びつきが合わせて97.30%を占めており、いずれも対象に状態の変化、または空間の変化をもたらす「受影性」の強い動詞をとる構文である。

- (19) 麓の平地は、なめらかな泥の平原となり、そこに草が芽を出し花を咲かせ、樹木が芽ぶいて成長をはじめ…（半村良『黄金奉行』）
- (20) これを4にもどして混ぜる。油脂が気泡を消すので、バターを加えてからは混ぜすぎないように。（横田秀夫『ホテルのお菓子とデザート』）
- (21) 木炭が一酸化炭素を発生して酸化鉄を還元するのに対して、薪の燃焼では一酸化炭素は出ません。（天田昭次『鉄と日本刀』）
- (22) 気候問題でもっと重要なことは、大粒子が日射を散乱し、また吸収することによって、地表の気温に影響を与えることである。（三崎方郎『微粒子が気候を変える』）

次に、中央の少し下にある「機械自律」「身体自律」「道具他律」の用例では、対象に状態または空間の変化を及ぼす動詞はいずれも8割前後を占めているが、軸の上に行くほどその割合が低くなり、中央の少し上に位置する「機械他律」「自然自律」になるとそれぞれ60.47%と57.45%になる。そして、もっとも上にある「身体他律」では、そのほとんどが(23)のような「受影性」の弱い接触動詞による結びつきで、対象に変化を及ぼす動詞の割合は21例中の3例のみとなっている。

(23) 宇佐美の手は、あたしの額から頬にうつり耳に触れ、ひとさし指がくちびるをなぞる。あたしはまちかに迫っている彼をみあげる。（杉村暎子『パストラル』）

以上のように、第2次元は「受影性」の程度を表し、「受影性」が強いものほど軸の下側に並んでいることが、対象に変化を及ぼす動詞の割合を見ることによって確認できた。

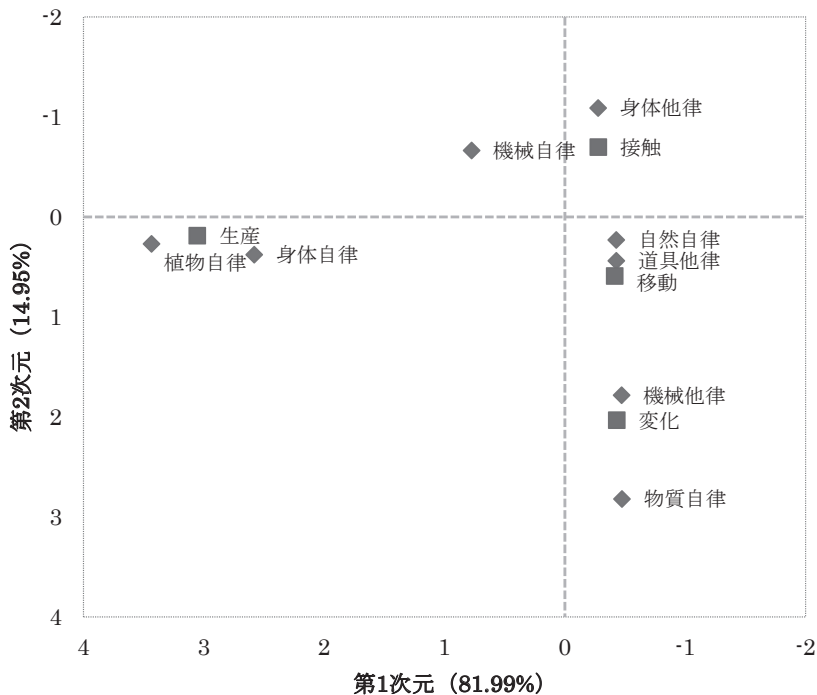


図2：中国語の散布図（第1次元と第2次元）

同じ手順で【図2】の中国語の散布図¹²についても軸（次元）の解釈を試みると、日本語と同じ結果が得られる。つまり、横軸（以下第1次元）は、「接触」「移動」「変化」と「生産」が分かれるため、「再帰性」を表わし、縦軸（第2次元）は、「生産」「移動」「変化」と「接触」が区別されるため、「受影性」を表わしていると解釈することができるのである。

用例を見ながらこれらの解釈の裏付けをしていこう。まず、第1次元のもっとも左側にある「植物自律」は9例のうち8例、約9割が(24)のような生産動詞による結びつきで

¹² 日本語の散布図と比較しやすいように、【図2】では中国語の散布図の横軸と縦軸を反転して表示した。コレスポンデンス分析では、座標の相対的な位置関係が分析の際に重要視され、負荷量の正負は大きな問題ではないため、軸を反転しても解釈の結果は変わらない。

ある。日本語の軸の解釈で述べたように、この用例では、対格名詞「実」が主格名詞「向日葵」の生産物であるため、両者が所属関係を成しており、「再帰性」をもつ構文である。

- (24) 看過向日葵結果 (和訳: 向日葵が実を結ぶ) 時的様子嗎? 在它那活像個大太陽的頭狀花上, 隱藏著兩種小花, 一種是位於外緣的舌狀花, 數量較少, 但花瓣扁而寬… (林恒『科學版』)

次に、「植物自律」より少し右に位置する「身体自律」では、13 例中の 9 例、約 7 割が (25) に示したような、生産動詞によって作られた「再帰性」をもつ結びつきである。

- (25) 有贅肉的現象, 這是因為胸肌和腋下韌帶支撐能力的降低, 以及懷孕時, 乳腺分泌乳汁 (和訳: 乳腺が母乳を分泌する) 造成的重量而失去張力所致. (江妙瑩『大台北經濟證券』)

そして軸の右側に行くと、「再帰性」をもつ結びつきの割合がさらに減り、原点の少し左にある「機械自律」では、その割合が 3 割を切っている。原点より右側に位置する「身体他律」「自然自律」「道具他律」「機械他律」「物質自律」の辺りになると、「身体他律」以外はほぼ「再帰性」をもつ生産動詞とは結びつかなくなっている。整理すると、中国語の散布図における第 1 次元も「再帰性」の程度を表し、「再帰性」が強いものほど軸の左側に並んでいると考えられる。

中国語の第 2 次元の解釈についても、用例を挙げながらその正当性を検討する。まず、もっとも下にある「物質自律」では 5 例のうち、「受影性」の強い「変化」「移動」「生産」と結びつく用例は 3 例で、用例数が少ないため確固たることは言えないが、一応 6 割を占める。次に、その上にある「機械他律」では、「受影性」の強い動詞と結びつく割合は 61.54% であるが、軸の上に行けば行くほどその割合は減り、「自然自律」「道具他律」「機械自律」辺りでは 4 割前後になり、もっとも上にある「身体他律」になると 77 例のうち、対象に変化を及ぼす動詞との結びつきは 15 例しかなく、その割合は 19.48% である。左に離れてある「植物自律」「身体自律」の 2 項目はどちらも 8 割前後で少し極端な値を示しているが、これは第 2 次元への寄与率が低いこととも関係していると思われる。以上をまとめると、第 2 次元では、きれいな順番にはならないが、軸の下から上へと「受影性」の強いものから弱いものへ並んでいく傾向がある程度見られる。

以上の解釈の結果は、日中のどちらの言語でも、「再帰性」と「受影性」が無生物主語他動詞文の成立において重要な要因であることを示唆している。ただし、1 つ注目すべき点として、日本語と中国語の次元の寄与率が異なることが挙げられる。【図 1】の日本語の場合、第 1 次元と第 2 次元の寄与率はそれぞれ 46.76% と 35.30% であるのに対し、【図 2】の中国語の場合は 81.99% と 14.95% となっている。すなわち、日本語では第 1 次元と第 2 次元はどちらも無生物主語他動詞文の成立において重要な役割を果たしているが、中国語ではもっとも大きな要因として効いているのは第 1 次元のほうであり、第 2 次元は日本語の場合に比べてそれほど影響力のある要因ではない。この点に関してはまた後に言及するが、次節より、名詞のタイプ (第 2 アイテム) に注目しながら、動詞のタイプ (第 1

アイテム) との関係をもつて見ていく。

6.1 自然自律によるもの

まず、「自然自律」タイプの名詞を見よう。散布図では、日本語の【図 1】の場合、「自然自律」は原点に近いところにプロットされている。これは、結びつく動詞のタイプにあまり偏りが無いことを意味する。実際の用例数も合わせて見ると、「自然自律」タイプの名詞はどの動詞ともよく結びついていることが観察される。(26)～(29)は、動詞のタイプが「変化」「移動」「接触」「生産」という順になっている。

- (26) 硫黄流が岩を砕いて崖が崩れたり段差ができているため、車は通行止めになっており、彼らはかなり手前で車を降りて…(高野裕美子『マリン・スノー』)
- (27) クライストカレッジの南入口あたりに出た。六月の日射しは強く、西風が砂を巻き上げていた。(星野力『甦るチューリング』)
- (28) 弘は住宅街の奥に向かって駆け出した。雨が顔を打つ。既に全身濡れ鼠だった。なぜだ！なぜだ！なぜだ！(松岡弘一『利己的殺人』)
- (29) 二階へ着がえに上がった。ヒューヒューと風が音をたてている。白樺の木がからだをうならせるようにして…(山崎玲子『もうひとつのピアノ』)

一方、中国語の【図 2】の場合、「自然自律」も日本語と同じく原点の付近にあるが、「生産」の動詞と非常に離れたところに位置する。これは、中国語の「自然自律」が生産動詞と結びつきにくいことを意味する。用例数をみると、日本語が 17 例であるのに対し中国語が 0 例と、かなりの差がある。以下に中国語の用例を挙げるが、(30)～(32)は、動詞のタイプが「変化」「移動」「接触」という順になっている。

- (30) 桃芝颱風毀壞了樟湖風景區(和訳: 桃芝台風が樟湖風景エリアを壊す), 但其他風景區或觀光景點並沒有遭受直接破壞, 只是部分通路被迫暫時中斷…(廖瑞宜『關懷森林生態之旅』)
- (31) 他的步子跨得很大, 海風掀起衣角(和訳: 海風が服をめくる), 又活像一隻大花蝴蝶。秀子加緊著小步, 半走半跑地拖在東尼身後十幾碼, 我則和凱洛琳並排押陣。(朱邦復『巴西狂歡節(五)』)
- (32) 有一個夜晚我獨自睡在長濱山上的精舍裡, 暴雨敲打鐵皮屋頂(和訳: 暴雨が鉄の屋根を打つ), 在這種夜晚真有震悼人心的感覺…(普恵星相命理哲學中心『慈悲喜捨的意義與修習方法(3)』)

以上をまとめると、「自然自律」に属する名詞は、日中両言語においても「硫黄流が岩を砕く」のような「受影性」の高いものから、「雨が顔を打つ」のような低いものまで、さまざまな動詞のタイプと結びつくが、中国語でのみ「風が音を立てる」のような「再帰性」が強い生産動詞とは結びつきにくい現象が観察された。

6.2 物質自律によるもの

「物質自律」タイプの名詞では、日本語の【図 1】は変化動詞との関連性をもっとも強く、用例数も 24 例と、中国語の 3 例を大きく上回っている。それらはすべて、「パン粉が水分を吸収する」「洗剤がよごれを落とす」「油脂が気泡を消す」のような、名詞の物理的な性質による力である。

- (33) 生活にまつわる情報を紹介したサイト。洗剤がよごれを落とすしくみや、虫菌がなぜできるかなどの疑問も解決してくれる。（日本経済新聞社『理科であそぼう』）
- (34) これを 4 にもどして混ぜる。油脂が気泡を消すので、バターを加えてからは混ぜすぎないように。（横田秀夫『ホテルのお菓子とデザート』）

ちなみに、中国語の散布図の【図 2】でも「物質自律」に属する名詞が変化動詞ともっとも近いところに位置するが、実際の用例数が非常に少なく、すべての動詞を合わせて見ても 5 例しかない。あまり生産的な結びつきとは言えないだろう。

6.3 機械自律と機械他律によるもの

「機械自律」タイプの名詞では、日本語は生産動詞と結びつきやすい。【図 1】では互いに位置が近い上、ほかのタイプの動詞とは正反対の座標に位置する。言い換えると、機械が自ら動き出した場合は、他のものに働きかけるほどの力をもたないことが多く、代わりに「シャンデリアが微光を放つ」のように、「再帰性」が強い生産動詞による結びつきが現れやすい。

- (35) その船から何隻かのボートが下ろされ、エンジンが唸りをあげた。メドゥーサ号の船長は部下に縄ばしごを下ろせ…（デイヴィッド・マレル『夜と霧の盟約』）
- (36) 青いビロードのカーテンが下がっている。シャンデリアが微光を放ち、制服を着込んだ案内係がプログラムや菓子売りにくる。（森田裕子『サーカス』）

これと関連して、日本語の「機械他律」を見ると、「機械自律」に比べて散布図の右上のほうへ寄っているのが分かる。その理由は、「機械他律」は生産動詞のほかに、「変化」「接触」とも結びつくために、相対的に右上のほうに引っ張られたからである。つまり、同じ機械による働きかけだが、背後に人間の制御が含意された場合は、生産動詞に加えて、「銃弾が胸を貫通する」「タイヤが路面を擦る」のような「再帰性」が相対的に弱い動詞とも連語を作りやすくなる、ということの意味する。(37) (38) は変化動詞、(39) (40) は接触動詞との結びつきである。

- (37) 弾丸が突きささっている。銃弾が胸を貫通したのだ。急に体から力が抜けていくのを感じた。（山本恵三『ドッグファイター『神竜』』）
- (38) 時速は六十数マイル。方向を変えるたびに、タイヤが砂をえぐる。サスペンションは激しくはずみつづけている。（ケント・ハリントン『死者の日』）

- (39) プッシュ型のトリガーを押すと撃発準備がなされ、離すとスプリング力で撃針が雷管を叩き筒内の黒色火薬に点火し…(広田厚司『ドイツの小銃拳銃機関銃』)
- (40) やがて、車は元来た道を戻っていく。タイヤが路面を擦る微かな音に、彼女は一度だけ振り返る。(今野緒雪『マリア様がみてる』)

中国語の場合では、「機械自律」タイプの名詞は【図 2】において「接触動詞」と距離的に近いが、用例が 6 例のみで確たる傾向とは言えない。一方、「機械他律」タイプの名詞は「変化」「移動」のほうに近づき、「受影性」の高い動詞との結びつきを作る。(41)(42)は変化動詞、(43)(44)は移動動詞との結びつきである。

- (41) 何以台電方面一再質疑是吊車扯斷地線(和訳: クレーン車がアース線を引き裂く)、主要是因為該地線是由七股鍍鋅絞鋼線絞成, 可承載七千二百二十六公斤的重量…(崔慈悌『林園大跳電』)
- (42) 中國時報記者徐宗懋在採訪六四天安門學潮時, 流彈穿頸(和訳: 流弾が首を貫通する)而過, 死裡逃生的他, 感謝老天賜給他的好運, 也油然而興起「命運」之念。(董小狐『算命非常安全守則』)
- (43) 而直升機群輸運特種部隊(和訳: ヘリコプター群が特殊部隊を運ぶ)進入阿境時, 將會有 AC-130 幽靈式戰鬥直升機, 各式噴射式戰鬥機, 監視敵方動向的偵察機…(陳文和『第二階段攻阿計劃』)
- (44) 連日來直升機空投食物(和訳: ヘリコプターが食糧を空中投下する)到番仔田, 前天傍晚居民接到強制撤離令後, 集合時才一一統計空投的食物…(張南詠『番仔田居民』)

この点は日本語と類似しており、人間の力が関与しない機械は「受影性」の低い動詞と結びつくが、人間の力が関与すると「受影性」の高い動詞とも連語を作るようになる。ただ、このタイプにおいて両言語の決定的な違いは、中国語には生産動詞による結びつきがあまりないという点である。「機械自律」と「機械他律」を合わせても 3 例しかない。日中の散布図を見比べると、中国語のほうだけ「機械自律」と「機械他律」が生産動詞から少し離れたところに位置することも、それを裏付けている。

6.4 身体自律と身体他律によるもの

「身体自律」タイプの名詞について、まず日本語の【図 1】を見れば、一見「移動」「生産」に近いように見えるが、用例数が少なく確たる傾向とはいえない。これに対し、「身体他律」タイプの名詞は「接触」のほうに近づくのが見て取れる。この現象は、人間の体が自律的に動く場合は、結びつきやすい動詞のタイプは特にないが、人間が意識的に体を動かすと、「片足が地面を蹴る」のように、接触動詞と連語を作る傾向が出てくることを意味する。用例数を見れば、「身体自律」の 2 例から「身体他律」の 18 例へと増えたのが分かる。「身体他律」タイプの名詞と接触動詞との結びつきを以下に示す。

- (45) 宇佐美の手は、あたしの額から頬にうつり耳に触れ、ひとさし指がくちびるを

なぞる。あたしはまちかに迫っている彼をみあげる。（杉村暎子『パストラル』）

- (46) 右より飛んできた独犢を、まず軽々と弾き返した。片足が地面を蹴った。もう一方の足が爪先立った。（朝松健『真田三妖伝』）

一方、中国語では、「身体自律」は「生産」と強い関連性をもつことが散布図の【図 2】で確認できる。その実例は以下のようなものである。

- (47) 他開始緊張，背脊生涼，手心冒汗（和訳：掌が汗をかく），爸爸就躺在病床上等著他，然雖只有一牆之隔的距離，短短的幾步路就可見到爸爸…（連明偉『多少年後的今天（1）』）

- (48) 有贅肉的現象，這是因為胸肌和腋下韌帶支撐能力的降低，以及懷孕時，乳腺分泌乳汁（和訳：乳腺が母乳を分泌する）造成的重量而失去張力所致。（江妙瑩『大台北經濟證券』）

そして、人間の意志が入った「身体他律」では、「再帰性」が強い生産動詞から離れ、日本語と同じく接触動詞のほうに近づいている。用例数が「身体自律」の 3 例から「身体他律」の 62 例に増えたことから分かるように、両者には非常に大きな差が見られる。以下に、接触動詞と結びつく用例を挙げる。

- (49) 東尼說：「好了，妳現在蒙著眼，不許看，要能做到腳踏板子（和訳：足が板を踏む），再練用手去接。」「不行，讓我多練一會。」貝珍求著。（朱邦復『東尼！東尼！（十二）』）

- (50) 你可以調整手指的角度，指尖觸弦（和訳：指先が弦を触る）是靠外側，置中或是內側，根據你自己的狀況來作調整。（孫沛元『中國樂器改良之隨想（三）』）

6.5 植物自律によるもの

「植物自律」タイプの名詞では、両言語の共通点として、「果樹が実を結ぶ」「草が芽を出す」のような生産動詞による結びつきに用例が集中していることが挙げられる。これは【図 1】と【図 2】の散布図からも見て取れる。植物が自らの力で外部の何かを変化させることは現実的に困難であるため、「受影性」の高い動詞とは連語を成しにくい。しかし、働きかけを自分に向け、「再帰性」が強い生産動詞による結びつきを作ることなら可能である。日中両言語の用例を、合わせて以下に示す。(51) (52) は日本語、(53) (54) は中国語の例である。

- (51) 輪廻転生は信じられているだけではなく、田の水が稲をはぐくみ，果樹が実を結ぶのと等しい…（矢口卓『ジャータカとブッダのお話』）

- (52) 麓の平地は、なめらかな泥の平原となり，そこに草が芽を出し花を咲かせ，樹木が芽びいて成長をはじめ…（半村良『黄金奉行』）

- (53) 看過向日葵結果（和訳：向日葵が実を結ぶ）時の様子嗎？在它那活像個大太陽的頭狀花上，隱藏著兩種小花，一種是位於外緣的舌狀花，數量較少，但花瓣扁而寬…

(林桓『科學版』)

- (54) 當地人說，雪嶽山有四個顏色，春夏是枝頭冒新芽（和訳：枝が新芽を出す），成長茁壯的綠色；秋天則為層層楓紅所覆蓋，成為黃紅山…（周立芸『新竹關西一日遊』）

6.6 道具他律によるもの

この分類では，人間が意図的に道具を使って何かを行うという用例を扱う．日本語の場合は，【図 1】によると「変化」に近いことが分かる．つまり，「道具他律」は，「メスが皮膚を裂く」のように，非常に「受影性」の強い動詞と結びつきやすいと言える．(55) (56) はどちらも変化動詞と結びついた用例である．

- (55) テツにはもうそれを省察する心の余裕はない．メスが皮膚を裂くときの痛みも，熱さを我慢するのに吸収されてか…（沼正三『家畜人ヤブー』）
- (56) 誤って注射針が神経を傷つけることによって起きる反射性交感神経ジストロフィー（伊藤精介『沈黙の殺人者・C 型肝炎』）

それに対し，中国語の場合，「道具他律」タイプの名詞は，【図 2】では「移動」に近く「変化」と「接触」の中ほどに位置する．日本語の場合に比べてそれほど変化動詞に近づいてはいないが，座標の右側に位置することから，生産動詞と結びつきにくい点において日本語と類似した傾向が見られる．(57) (58) (59) はそれぞれ変化動詞，移動動詞，接触動詞と結びついた用例である．

- (57) 萬料不到他適才竟是裝死，連長槍刺入身子（和訳：ヤリが体を突き刺す）都渾似不覺，斗然間又會忽施反擊，一驚之下，六七八人勒馬退開．（金庸『白馬嘯西風』）
- (58) 算命先生的話淡淡消失，阿小豎起耳朵，有獨輪車軋過路面的沉重轟鳴，喧嘩的外國女子高聲尖笑走遠，腳踏車鈴，踏板捲動鏈條（和訳：ペダルがチェーンを回す）沙沙滾轉…（丁三點『蠻王孟獲在上海』）
- (59) 輪到陳文賓打擊，對方投手投出一記外角快速球，陳文賓揮棒稍慢，只有棒頭敲中球（和訳：バットの先がボールを打つ），雖然未正中棒芯，白球還是飛過了全壘打牆…（劉滌昭『卜派陳文賓』）

7. まとめ

本稿の結論をまとめると以下ようになる．まず言えるのは，対格名詞を物に限定した「物に対する働きかけ」の場合，日本語と中国語の無生物主語他動詞文の成立においては，動詞の「再帰性」と「受影性」とが共通の要因として働いているということである．これと関連して，各タイプの名詞と結びつきやすい動詞の種類は，その名詞の性質と深く関わっていることも分かった．例えば「雨」「風」のような「自然自律」タイプの名詞は，もともと大きな力をもつため，「受影性」の高いものから低いものまで幅広い動詞と結びついて連語を作っている．その一方，「樹木」のような「植物自律」タイプの名詞はそもそも外部に働きかける力が弱く，「樹木が実を結ぶ」のような「再帰性」の強い生産動詞による結びつきに集中している．次に，名詞の「他律性」もある程度，結びつきやすい動詞

のタイプと関係していることが観察された。例えば、「自律」「他律」の両方になり得る「機械」「身体」タイプの名詞は、「他律」のほうが「自律」よりも「受影性」の高い動詞と結びつく傾向のあることがその証左である。

一方、両言語の最大の相違点として、日本語では「自然自律」「機械自律」「機械他律」タイプの名詞が「風が音を立てる」「シャンデリアが微光を放つ」「車が風を巻き起こす」のような生産動詞による結びつきを数多く作るが、中国語では同じタイプの名詞にこのような結びつきがあまり観察されなかったことが挙げられる。言い換えると、中国語では特定のタイプの名詞と結びつくとき、動詞が「再帰性」をもつかどうかによって、その無生物主語他動詞文の成立が大きく左右される。前節にも述べたように、両言語の散布図の寄与率を見れば、日本語のほうでは第1次元（「再帰性」を表わす次元）と第2次元（「受影性」を表わす次元）が両方とも一定の比率を占めているが、中国語のほうでは「再帰性」を表わす第1次元がそのほとんどを占めている。この寄与率における比率の違いも、中国語の「再帰性」という要因の重要性を示唆している。

本稿では、連語論的アプローチとコレスポネンシ分析を用いて、日本語と中国語の無生物主語他動詞文を調査・分析した。しかし、これはあくまでも「対格名詞」を「物」に限定した結論である。無生物主語他動詞文の全貌を見るためには、「人に対する働きかけ」「事に対する働きかけ」も合わせて考察する必要がある。また、今回の調査では主に単文レベルの要因に焦点を当てたため、文章レベルでの要因を考慮に入れなかった。この点に関しても今後の課題としたい。

付記

本稿で用いた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は、大阪大学文学研究科日本語学講座が国立国語研究所と交わした利用許諾契約に基づき使用したものである。また、本稿は日本語学会 2015 年度春季大会（関西学院大学）における口頭発表を加筆・修正したものである。会場にて皆様から貴重なご意見を賜った。なお、審査の過程で査読者の方々から有益なご助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

文献

- Hopper & Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language* 56(2), pp.251-299.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert. M. W. (ed.) *Grammatical Categories in Australian Language*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, pp.112-171.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『国語学』第 70 集, pp.46-66.
- かねこ・ひさかず (1990) 「非情物主語の問題から」『国文学解釈と鑑賞』第 55 巻第 7 号, pp.36-46.
- 言語学研究会 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 (増補改訂版)』大日本図書
- 鈴木康之 (1983) 「連語とはなにか」『教育国語』第 73 号, pp.30-43.

- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』第 103 集, pp.1-17.
- 趙元任 (1979) 『漢語口語文法』商務印刷館
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 仁田義雄 (1985) 「言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』を読んで」『国語学』第 140 集, pp.44-50.
- 丸山直子 (2015) 「コーパスにおける格助詞の使用実態—BCCWJ・CSJ にみる分布—」『計量国語学』第 30 巻第 3 号, pp.127-145.
- 宮島達夫 (2005) 「連語論の位置づけ」『国文学解釈と鑑賞』第 70 巻第 7 号, pp.6-33.
- 宮田剛章 (2006) 「敬語名詞および敬語機能の分類—日本語母語話者の判断を通して—」『計量国語学』第 25 巻第 6 号, pp.245-261.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 熊鷹 (2009) 『鍵がドアをあけた』笠間書院
- (2014) 「日本語無生物主語他動詞文の許容に影響を与える要因とその関係」『学習院大学大学院日本語日本文学』第 10 号, pp.110-94.

用例出典 (文中に引用したもののみ示す)

- 【現代日本語書き言葉均衡コーパス DVD 版 Version 1.1】朝松健 (2002) 『真田三妖伝』祥伝社／天田昭次 (2004) 『鉄と日本刀』慶友社／伊藤精介 (2000) 『沈黙の殺人者・C 型肝炎』小学館／今野緒雪 (2000) 『マリア様がみてる』集英社／折原一 (1992) 『灰色の仮面』講談社／北野勇作 (2001) 『昔、火星のあった場所』徳間書店／ケント・ハリントン (2001) 『死者の日』扶桑社／佐藤藤三郎 (1996) 『村に、居る。』ダイヤモンド社／二条睦 (2000) 『監獄女医』角川春樹事務所／杉村暎子 (1994) 『パストラル』講談社／高野裕美子 (2003) 『マリン・スノー』新潮社／立原とうや (1995) 『掟』集英社／デイヴィッド・マレル (1988) 『夜と霧の盟約』早川書房／中津文彦 (2002) 『塙保己一推理帖』光文社／中村博男 (2000) 『若き日の小津安二郎』キネマ旬報社／日経サイエンス (2002) 『理科であそぼう』日経サイエンス社／沼正三 (1999) 『家畜人ヤブー』幻冬舎／半村良 (1991) 『黄金奉行』祥伝社／広田厚司 (2002) 『ドイツの小銃拳銃機関銃』光人社／古澤亜童 (2004) 『中国花みるみる』社会評論社／星野力 (2002) 『甦るチューリング』NTT 出版／舞阪洸 (1994) 『陽炎のエラン』集英社／松岡弘一 (1993) 『利己的殺人』実業之日本社／三崎方郎 (1992) 『微粒子が気候を変える』中央公論社／森詠 (1996) 『戦場特派員』廣済堂出版／森田裕子 (1995) 『サーカス』文遊社／矢口卓 (2003) 『ジャータカとブッダのお話』グラフ社／山崎玲子 (2002) 『もうひとつのピアノ』国土社／山田満郎 (2001) 『8 時だヨ！全員集合の作り方』双葉社／山本恵三 (2002) 『ドッグファ이터』神竜』白石書店／横田秀夫 (2001) 『ホテルのお菓子とデザート』柴田書店／吉永小百合 (2003) 『吉永小百合街ものがたり』講談社
- 【中央研究院平衡語料庫 DVD 版 Version 3.0】丁三點 (2003) 『蠻王孟獲在上海』聯合文學／朱邦復 (1994) 『巴西狂歡節 (五)』時報／朱邦復 (1994) 『東尼！東尼！(十二)』時報／江妙瑩 (1993) 『大台北經濟證券』時報／周立芸 (2003) 『新竹關西一日遊』聯合文學／林桓 (1992) 『科學版』光復書局／金庸 (1996) 『白馬嘯西風』遠流／孫沛元 (1994)

『中國樂器改良之隨想(三)』中山大學／崔慈悌(2001)『林園大跳電』時報／張南詠(2001)
『番仔田居民』時報／連明偉(2003)『多少年後的今天(1)』聯合文學／陳文和(2001)
『第二階段攻阿計劃』時報／普惠星相命理哲學中心(2002)『慈悲喜捨的意義與修習方法
(3)』普惠星相命理哲學中心／董小狐(1996)『算命非常安全守則』時報公司美麗佳人雜
誌／廖瑞宜(2001)『關懷森林生態之旅』時報／劉滌昭(2003)『卜派陳文賓』民生報

(2016 年 2 月 10 日受付, 2016 年 6 月 23 日再受付)

Paper A

A Contrastive Study of Japanese and Chinese in Transitive Sentences
with Inanimate Subjects by Using Theory of Collocation:
An Investigation of Factors by Using Correspondence Analysis

MA Tzu-Hsuan (Graduate School of Letters, Osaka University)

Abstract:

This paper attempts to compare the differences of transitive sentences with inanimate subjects such as “The key opened the door.” between Japanese and Chinese by theory of collocation. After using correspondence analysis to evaluate example sentences gathered from corpus of Japanese and Chinese, it was found that ‘recursiveness’ and ‘affectedness’ of verbs are the common factors in transitive sentences with inanimate subjects between Japanese and Chinese (confining nouns marked by accusative case to tangible things). What kind of collocation a verb makes with a noun is deeply involved with the character of the noun. For example, the type of natural nouns (autonomy), such as “wind”, makes collocations with verbs which have strong affectedness to weak ones. By contrast, the type of plant nouns (autonomy), such as “tree”, makes collocations only with verbs which have recursiveness. Finally, the most important difference between the two languages is that some types of nouns such as the natural ones (autonomy) make a large number of collocations with verbs of productivity like “The wind makes sounds.” in Japanese, but this kind of collocations made by the same type of nouns rarely appear in Chinese.

Keywords: transitive sentence with inanimate subjects, theory of collocation, correspondence analysis, BCCWJ, SINICA, recursiveness, affectedness, heteronomy, contrastive study of Japanese and Chinese